

国際化の時代に ふさわしい姿とは何だろう



～外国の人たちとの交流に必要なもの～

オリンピック・パラリンピックを前に、市でもルーマニア柔道ナショナルチームの事前キャンプを受け入れるなど、国際交流への機運が高まっています。福津を訪れる外国の人や、地域で暮らす外国の人と接する時に必要なことについて考えてみませんか。



▲「日本語教室わかば」の日本語の授業風景



街角記者

どひ やすみ
土肥 保見

広報ボランティアとして初めて取材を行いました。福津市観光ボランティアガイドとしても活躍中。

「街角記者が行く」とは、広報ボランティアが読者の皆さんを代表して記者となり、街角に出て、市や関連団体の取り組みを取材するコーナーです。記者の目線で、時には歯に衣着せぬ物言いで関係者を取材し、皆さんの疑問に答えていきます。

市内で暮らす 外国の人たちの現状

私は観光ボランティアガイドとして、福津を訪れる観光客の皆さんを案内していますが、最近は海外からの観光客が増えてきたように感じています。また、市内でも外国の人を見掛けることが多くなってきたような気がします。

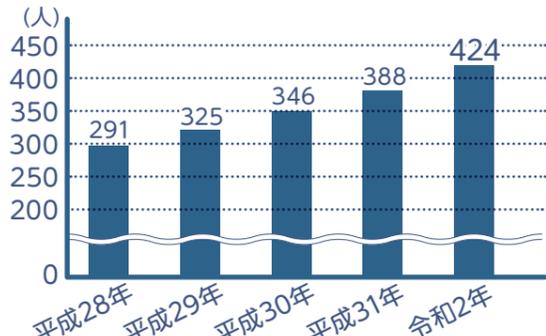
さらに、今年は日本でオリン

ピック・パラリンピックが開催されるため、これをきっかけに日本を訪れる外国の人と交流する機会がさらに増えてくると思います。そこで、市内に住む外国の人の現状について調べてみました。

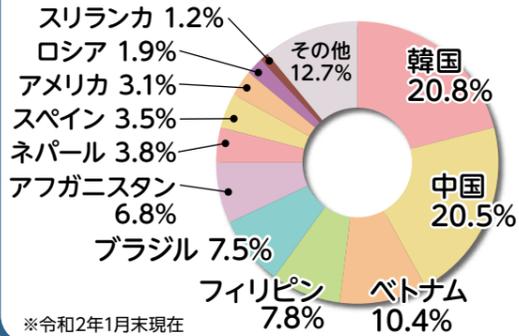
市の人口が年々増加していることは皆さんもご存じだと思いますが、市内に住む外国の人の人口も、年々増加していることが分かりました。出身国別

市内に住む外国の人たち

市の外国人人口の推移



市の外国人住民の
国別割合(%)



に見てみると、韓国が最も多く、次に中国が多くなっています。韓国や中国以外にも、ベトナムやフィリピン、ブラジル、アフガニスタン、ネパール、スペイン、アメリカなど世界各国からやってきた人たちが市内で暮らしていることが分かりました。

市内で暮らす外国の人が増えている中で、これからは外国の人たちと交流することはますます増えてくるでしょう。一方で、急に国籍や文化、言葉が異なる人たちと交流することはなかなか難しいようにも思いました。

そこで、国際交流の推進や外国の人と共に生活していく上で必要なことを知るために、実際に市内に住んでいる外国の人や外国の人を支える人たちの声を聞いてみることにしました。

市内の 日本語教室を訪問

市内や近隣の市町で暮らす外国の人たちに日本語を教えている「日本語教室わかば」を訪ねました。

日本語教室わかばは、平成15年から活動していて、ボランティアの人たちによって運営されています。教室は市中央公民



▲日本語教室わかばの先生と生徒の皆さん

館の中にあるボランティアセンターなどを会場に、毎週火曜日の午後が開かれています。この教室では、日本語を教えるだけでなく、生徒に日本の生活に必要なことをアドバイスすることもあります。

現在教室に通っている生徒の出身国は中国やベトナム、フランス、デンマーク、カナダなど多岐にわたります。今回、教室に通う生徒の中から、郷土カレッジの講師の経験もあるスリランカ出身のダヌカ・トシャールさんとフィリピン出身の小林チャリナさんに、福津で暮らすことについて教えてもらいました。

街角記者が行く

～広報ボランティアの取材報告～



ここ住みますが スリランカとフィリピンのこと

今回、取材に協力してくれたダヌカさんとチャリナさんの出身国である、スリランカとフィリピンを紹介します。



スリランカ



正式名称 スリランカ民主社会主義共和国
 首都 スリジャヤワルダナプラコッテ
 人口 約2,144万人 (2017年)
 面積 65,610平方キロメートル (九州ほどの大きさ)

インドの南東に位置する島国で、かつてはセイロンと呼ばれていました。紅茶やルビー、サファイアなどの宝石の生産でも有名な国です。日本との貿易も盛んな国で、日本への主な輸出品目は紅茶やマグロ、エビなどで、日本からは自動車や電気製品などを輸出しています。ダヌカさんによると、日本の製品は品質が良く、とても人気があるそうです。

フィリピン



正式名称 フィリピン共和国
 首都 マニラ
 人口 約1億490万人 (2017年)
 面積 299,404キロメートル (日本の8割ほどの大きさ)

東南アジアの島国で、7千を超える島から構成されていて、セブ島をはじめ、日本人にも人気のリゾート地がたくさんあります。バナナの産地として有名で、日本に輸入されているものの9割はフィリピン産です。平均気温は26度前後と、年間を通じて暖かい気候で自然の豊かな国です。チャリナさんによると、フィリピンの人は優しい人が多く、日本人の性格とよく似ているとのこと。

街角記者が行く

Vol.11

～広報ボランティアの取材報告～

「参加した」と語っていました。チャリナさんの取材時に同席してくれた梶尾樹里さんも「福津で暮らす外国の人たちを支えたい」との思いで活動に参加した」と話していました。日本語教室わかばのボランティアの皆さんのように、外国の人たちを地域の一員として支える取り組みが市内に広がっていくことが大切だと思いました。

また、増井さんと木本さんによると外国の人だからという理由で、家を借りたり、携帯電話の利用契約をしたりすることが難しくなることがあるそうです。外国の人と接するときは、相手と自分の考え方が異なっていたとしても、相手のことを知ろうと努力し、その人の立場に立つて手助けすることが大切だと思いました。

国際化の時代に 必要な姿

市内で暮らす外国の人は年々増えています。国際交流の推進や、市内に住む外国の人たちと、同じ地域の仲間として共に暮らしていくために、外国の人がいたら気軽に声を掛け、困っていることがあれば協力したいと思っています。そして、正しい情報に

基づいて外国のことについて学び、外国の人たちに対する理解を深めていきたいと思っています。国籍や文化などの違いを尊重しながら、外国の人たちと共に生きていくことを「多文化共生」といいます。多文化共生を進め、外国の人たちともお互いに支え合うことが、これからの国際化の時代にふさわしい姿なのではないでしょうか。

日本や福津の ここが良い

ダヌカ・トシヤアラさんは、スリランカで自動車の修理方法について学び、自動車関連の仕事に就くために来日しました。ダヌカさんに日本や福津の良いところを聞くと、子どもに対する社会保障が手厚いこと、道路や歩道が整備されていることなどを挙げてくれました。また、スリランカには子どもたちの登下校を見守る「見守り隊」のような人はいないため「地域の大人が子どもたちの安全を守ってくれるのでありがたい」と話してくれました。スリランカでは、



▲「日本での生活は楽しい」と語るダヌカさん(中央)と村上さん(左)

自分の子どものことは自分で守らないといけないという考え方があり、日本の「自分の子どもだけではなく、子どもたち全員を大切にしよう」という考え方は素晴らしいと思ったそうです。小林チャリナさんは、仕事でフィリピンに来ていた日本人のご主人と出会い結婚。7年前に来日しました。チャリナさんは日本や福津の良いところを「治安が良く、子どもだけで学校に行ったり、女性一人でも安心してジョギングしたりできる」と話してくれました。また、乳幼児健診や医療保険の制度が整備されている点なども素晴らしいと話してくれました。



▲「福津は住みやすい」と語るチャリナさん(右)と梶尾さん(左)

日本や福津に来て 困ったこと

ダヌカさんとチャリナさんは、日本はとても住みやすい国だと話してくれましたが、困ったこともあったとのこと。ダヌカさんは「日本に来てすぐの頃は日本語が分からなくて困った」と語りました。しかし、日本語教室わかばの先生たちが日本語を教えてくれたので、今では他の人にも教えることができるようになるまで上達したそうです。

チャリナさんに困ったことを聞くと「大学院で経営学を学んだので、その知識を生かせる仕事に就きたいが、外国人なので難しいところがある」と語りました。

外国人たちを支え 偏見をなくそう

ダヌカさんとチャリナさんの話を聞いて、外国の人と交流するためには、会話や公共交通機関の利用方法など、日常生活で困った時に支えることや、外国の人だけじゃなくて日本人と区別しないことが必要だと感じました。



外国の人との交流で必要なことについて語る増井さん(左)と木本さん(右)▶